解夏のころに願うこと

yoshina

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
解夏のころに願うこと

【Ｎコード】
Ｎ７６９１Ｈ

【作者名】
ｙｏｓｈｉｎａ

【あらすじ】
平和。夏休みの終わりの夜、二人で外に行く。少しラブめでしんみり系。

ラーメンを食べに行かへんか、とメールで誘われたのが夜の八時過ぎ。
高校生なら親がしかめそうな時間だったが、相手があの幼馴染ということもあり、「なるべく早く帰るんやで」という言葉一つで見送ってくれた。
そして十時前。
和葉は平次と河原の土手に二人で座っていた。
平次が和葉の家にバイクで迎えに来て、そう遠くはないラーメン屋で味噌味のラーメンを食べて、ここに寄った。
これも平次の案だった。「お腹いっぱいになったさかい、ここで一服しよ」と。
いつもと変わらない日常と言えば、そうだ。
しかし、そんな平次の行動に和葉は少しの違和感を覚えつつ頷いていた。

「そろそろ夜は涼しなってるね」
「ああ、でも昼間はまだ暑いやろな。明日から学校やけど」
「夏休みも今日で終わりかあ」

膝を山型に折って、和葉は黒い空を映しだす川を見つめる。
星は、ちらほらとだけ輝いている。
一方平次は寝そべって、そんなささやかな輝きを仰いでいる。

「宿題終わった？」
「俺を誰やと思てんねん」
「はいはい。期末テスト一位やった平次君です。あーなんかムカつくやっちゃなあ」

意外とまじめに授業や模試はちゃんと受ける平次は、テストでもトップクラスだ。
和葉も優秀なほうだし理系はトップだが、全科目を合わせると彼には敵わない。
ちなみに、東の名探偵は現在夏休み返上で補講を受けており、その幼馴染はそれを家でサポートしているそうだ。
平次に負けず劣らず頭の出来はいい名探偵でも、さすがに半年以上学校を休んだのは痛かったらしい。
こんなに一気に猛勉するの初めてだ、という弁を蘭から和葉は聞いていた。
洋館の大きな部屋の中で、頭にはちまき巻きそうな勢いで勉強する新一と、お茶持ってきたりノートを見せたりする蘭。
その様子を思い浮かべて和葉はくすりと笑った。

「……なんや」
「ううん。ただ、東京のあの子らは宿題終わったんかなーって」

ああ、と合点がいったように平次は相槌を打ち、寝そべったままズボンのポケットをまさぐった。
そしてケータイを取り出し、少し操作をした後和葉にぽいとよこした。
受け取った彼女は、画面にうつるメールの内容を読む。
『補講も宿題も模試もぜんぶ終わらせたぞ。夏休み前、全部出来たら逆立ちで１００メートル歩くなんて言ってたの覚えてるよな？』
なんという子供じみた賭けを、と和葉は思わず噴き出し笑いながら平次にケータイを返した。

「あんたやらなあかんやん。逆立ち」
「一か月前のしょうもない会話を未だ覚えていた工藤の執念に完敗

やわ……。ここ暫く事件にも顔出さへんかったみたいやし、何でやろと思ってたけど、まさかこんなオチとはな」

知らないうちに工藤のプライドに触れるセリフを言ってたらしい、と平次は苦笑してケータイを元のポケットになおした。

「でも、来年の今頃は俺も工藤みたいに勉強に専念せなあかんな」

独り言のように、ぽつりと出された言葉。

和葉は何故か一瞬どきりとしたが、表には出さず返事をする。

「へー、ようできはる平次君でも受験勉強はしっかりするんや」

「万が一、ということもあるしな」

珍しく言い返さず、彼はため息だけをつく。

「参考書買うて、過去問集買うて、繰り返しそれ解いて、合間合間に単語の復習。事件にも顔出さんと、予備校には行かんつもりやし、家にこもってそんな夏休み。あー楽しすぎて死にそうやわ」

言葉とは裏腹に全く楽しくなさそうな表情を、和葉は見降ろして彼女も顔をしかめる。

「う。私も死にそうやという意見には同感やわ。……でも、意外やなあ。平次からそんな計画が出されるなんて。あんたのことやし、要領よく勉強も事件もこなしそうなもんやけど」

疑問を素直に口に出すと、彼はちらりと彼女を見た。

そしてゆっくり上半身を起き上がらせた。

寝そべってたせいで、起きたと同時に彼の背中から雑草がぱらぱ

らと落ちる。
夜なのに後ろ向きにかぶっていた帽子にも草はついていた。

「一度、そんな生活してみよと思たんや」
「え？」
「事件に関わらず、府警の刑事らとも会わず、普通の高校生っちゅうのをやってみようかなと思う」

神妙な顔つきで彼は言った。
その横顔を傍で見て、和葉は彼が冗談を言っているわけではないとすぐにわかった。

「なんで、そう思ったん？」
「ええやん別に。俺かてたまには普通に生活してオカンに小言言われんようにしたろかなって思ったんや」

彼は投げやりに言う。
それを、和葉は何も返さずじっと見つめた。
夜も遅くなってるとはいえ、時々彼女らの後ろを、犬を連れた老人や花火セットを持った若者たちが通り過ぎていく。
川の流れはゆるやかで、波音は二人のところまでは届かなかった。
暫くの、間。
そして。

「いや、嘘やな」

沈黙に音を上げのは平次のほう。
彼はかぶりを振る。

「ホンマは、普通の高校生になっても俺は俺なんやろかと思ったん

や。小さい頃から自然と俺の傍には事件があった。探偵と名乗る前からな。そんな事件を一度切り離してみたくなったんや。受験はそれのええ機会やった」

和葉は、すぐに彼の言葉を理解できなかった。
しかし、涼しげな風が二人の間を吹き通る時、なんとなくわかった。
理屈ではなく、感情で。
きっと平次は、これを伝えるために今夜自分を誘ったのだ。
最初抱いた違和感の原因はこれだ。
来年の夏休み前に同じことを彼は言わないだろう。
彼のことだから、自然な流れで事件から自身を切り離していくだろう。
一年前の今だからこそ、彼は自分に教えてくれた。
でも、教えてくれたのはなぜ？
彼女は違和感の代わりに一抹の不安を覚える。

「――ねえ、その時あたしは隣にいてええの」

少しびっくりしたように、彼は和葉のほうに顔を向けた。
彼女は寂しげな表情を浮かべていた。
もしかして、教えてくれたのはその時自分も切り離されてしまうのだろうか、と思ってしまったから。
一方平次は目を丸くして、そんな彼女を見つめる。
彼女の心を知ってか知らずか、右手を伸ばしてそのままくしゃりと和葉の頭をかいた。
結構豪快に。

「アホ面かくなや」
「な、あんたこそ急に頭掻き回さんといてえな！」

和葉はあわてて両手で頭をカバーする。
それを笑いながら平次は見るが、すぐに真顔に戻る。
「アホ。逆や」
二度目のアホとともに出された答えは、和葉の髪をなおす手を止めさせた。
「逆？」
「事件切り離した俺はつまらんかもしれんけど、四六時中勉強するわけやないんやし、時々はこうやってラーメンでも食べに行こうや」
いつになく優しい声と目で言われるものだから、彼女は思わず固まってしまった。
硬直した和葉を勘違いしたのか、平次は付け足す。
「まあ、そらお前かて同じように受験なんやし、困るんやったらええけど」
「こっ困らん！　困らん！　それに、探偵やないあんたでもつまらんことない！　絶対に！　むしろハラハラせんでええし気が楽や！！　今からでも学校に専念してもろてもええねんで！？」
あわてて否定した声は大きめで、でも向こうっ気の強さは健在で、平次はオーバー気味に耳をふさいだ。
「へー、へー、わかったわかった。とにかく、そういうことやし。来年の今頃、おとなしく家におっても変に心配せんでええしな」
「べ、べつに心配なんかせえへんわ。せいぜい冷たいもん食べ過ぎてお腹壊したんやろかとか思うだけやわきっと」

和葉はぷいと顔をそむけて、頬の赤さを見せないようにした。
今が夜でよかった。昼間なら、顔をそむけても首の赤さまでは隠せないだろうから。
彼の普通の高校生活の中に、自分もいる。その安堵が彼女を嬉しさでいっぱいにさせていた。
さすがの平次も、彼女の乙女心までは察していないだろう。
俺は夏でも常温のお茶が好きや、と言い返して、彼は立ち上がった。
時計を見ると十時半。ここから二人の家までは十五分くらい。
今までの経験からして、近所なら日付越えるまでは怒られない。
お小言はもらってしまうだろうが。
彼は気合を入れるように、息を吸い込んで大きく吐いた。

「さて、工藤への約束を守るか」

虚を突かれたように、思わず和葉が振り向く。

「え、ほんまにすんの？　今から？」
「せっかくまっすぐなええ道があるしな。夜で人もおらんし、やるなら今やろ」

屈伸運動を始める平次を呆れたように和葉は眺めた。
しかし止めることはせず、次に彼女も立ち上がって背伸びをする。
暫く座っていたので、関節のところどころが乾いた音を出した。

「おい和葉、証拠のためにケータイの録画機能使ってうつせ」
「はいはい。でもホンマに出来んのー？」
「剣道で毎日腕立て伏せしてるんや。多分出来るやろ。それに、出来ひんかった時の工藤の嬉しそうな顔が腹立つし、ぜったやったる」

先ほどの横顔からはギャップのありすぎる、子供のような意気込み。
彼から帽子を受け取った和葉は、それを大事そうに両手で持つ。
「……うん、きっと平次はいつまでたっても平次や」
「ん、なんか言うたか」
「なんでもなーい。ほら、もう遅いんやしはよ始めぇな！」
「おう。しっかり隣で写しといてや」
「はいはい、ちゃんと隣にいときます」
和葉はぽすんと帽子を自分の頭にかぶせて、彼の傍に立った。
そして彼の真意を思い返す。
――普通の高校生になっても俺は俺なんやろかと思ったんや
おそらく、これは彼が出した唯一の不安。
来年の今頃、彼はそれを払拭出来てるのだろうか。
願わくば、その答えと共に自分が、傍に。
「うん、ちゃんといとくよ」
自身への誓いのように、彼女は帽子のつばをきゅっと抑えた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7691h/

解夏のころに願うこと

2010年10月12日02時08分発行